



# 田村市 都路町頭ノ集 集落調査 報告書

福島大学経済経営学類  
藤原遥ゼミナール

2022年度  
集落自主活動に係る伴走支援事業実施報告書



# 田村市都路町頭ノ巣 集落自主活動に係る伴走支援事業実施報告書

## 目次

1. 活動の目的とスケジュール .....	2
2. 田村市都路町頭ノ巣地区の概要 .....	3
2-1 地理.....	3
2-2 人口.....	5
3. 頭ノ巣の景観 .....	6
3-1 農林地管理の課題.....	6
3-2 鳥獣被害 .....	6
3-4 景観づくりにおける展望.....	6
4. 頭ノ巣のコミュニティ .....	8
4-1 結の機能と課題 .....	8
4-2 行事の現状と課題.....	8
4-3 食に関わるコミュニティの現状と課題.....	8
4-4 コミュニティづくりにおける展望 .....	9
5. 頭ノ巣の集落計画づくりに向けて .....	12
5-1 景観づくり .....	12
5-2 コミュニティづくり .....	12

## 1. 活動の目的とスケジュール

藤原遥ゼミナールでは、2020年10月から田村市都路町頭ノ巣集落（以下、頭ノ巣）を対象に調査・活動をしてきた。これまでの訪問回数は累計で9回である。2020、2021年度には、福島県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業（以下、大学生事業）」の助成金を受けて、実態調査、実証活動を行ってきた。今年度からは、2年間の大学生事業を終えた団体を対象に設けられた福島県の「集落自主活動に係る伴走支援事業」の助成金を受けて、伴走支援を開始した。

伴走支援は、集落との絆をより強くし、集落の更なる活性化を図ることを目的とする事業である。集落側には、伴走支援をする団体を受け入れるにあたり、福島県の「サポート事業」に申請することが要件とされている。サポート事業は、福島県内の地域活動を支援する補助事業である。頭ノ巣では、これまで当ゼミナールと議論してきた中で、景観・コミュニティづくりを核にして集落計画をつくることを検討してきた。サポート事業のメニューの中に、集落活性化事業（集落等再生計画策定事業）という集落計画づくりを対象とする助成金があったことから、頭ノ巣では今年度、同事業に申請した。採択されれば、来年度から本格的に集落計画づくりが始まる。

藤原遥ゼミナールでは、頭ノ巣において集落計画づくりをサポートすることを目的に、今年度から伴走支援を始めた。伴走支援事業の助成期間は2年間である。今年度は、来年度から本格的に取り組む集落計画づくりに向けて事前準備を行った。大学生事業を通じて得られた情報をさらに深掘りするかたちで、集落の住民に対してヒアリング調査を行い、実態把握につとめた。来年度からは、集落の住民に対してワークショップを行い、集落計画のビジョンや目標を定め、具体的な事業内容や土地利用の方法を検討していく予定をしている。

今年度は、2022年6月、8月、11月、2023年2月の計4回にわたって調査を実施した。本報告書には、今年度実施した調査を通じて、新たに入手した情報を盛り込んでいる。2020年度に発表した実態調査報告書と重複する部分は省略してある。



2022年6月に実施した調査の様子



2023年2月に実施した調査の様子

## 2. 田村市都路町頭ノ巣地区の概要

### 2-1 地理

都路町は、田村市東部に位置する。

1889年の市町村制によって、古道村と岩井沢村が合併し、都路村が誕生した。その後、都路村は2005年に田村市に合併した。

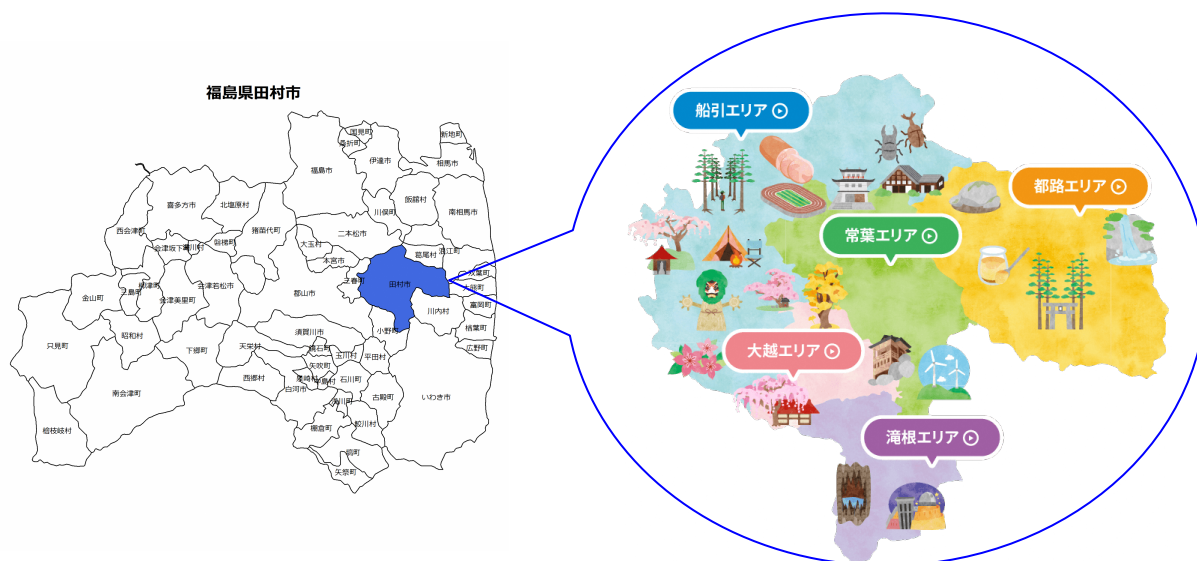


図1 田村市と都路町の位置

出所：田村市ホームページより筆者作成。

頭ノ巣は、田村市都路町の南部に位置する。標高は450~650m、全長は8kmほどである。都路町には12の行政区がある。頭ノ巣は、隣接する大久保集落とともに第10区に位置づけられている。

頭ノ巣の地形は、シンボルの木でもあるイチョウの葉の形をしていると言われている。図2は、藤原遥ゼミナールのメンバーの一人がイチョウにたとえて集落の地図を描いたものである。頭ノ巣の入り口には、ふくしま中央森林組合都路事業所木材加工センターの看板がある。看板の周りには頭ノ巣の女性たちによって赤いベコニアの花が植えられている。ベコニアが、集落に来る人たちを温かく迎え入れてくれている。頭ノ巣の中心には集会所と二柱神社がある。二柱神社と集会所の間に位置する大径木の乳イチョウは、集落のシンボルとなっている。道路に沿って住宅が並び、住宅の向かい側には、阿武隈地域特有のなだらかな山々と田畑が広がっている。豊かな自然に囲まれた地域である。

頭ノ巣の入り口と集会所の間に、戸草という地区がある。現在、頭ノ巣では戸草を中心に、景観づくりをはじめている。



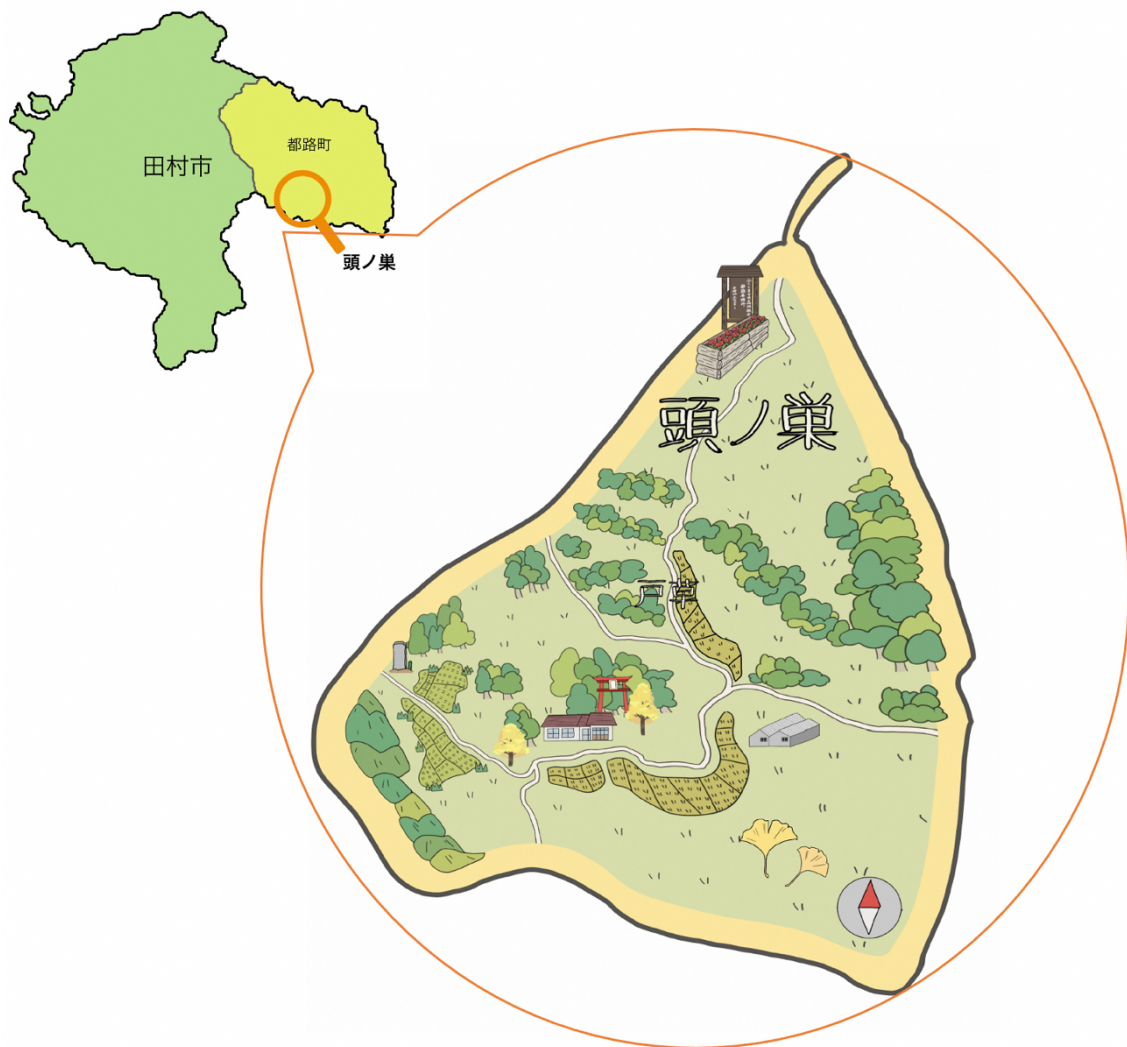
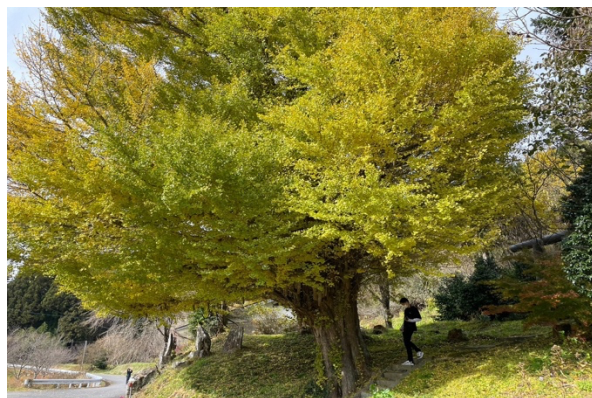


図2 都路町と頭ノ巣の位置  
出所：筆者作成



頭ノ巣の入り口の看板とペコニア



大径木の乳イチョウ



二柱神社



二柱神社から見た集落の景色

## 2-2 人口

東京電力福島第一原子力発電所事故（以下、福島原発事故）直後は都路町全域が避難指示区域に指定され、頭ノ巣の住民も避難を余儀なくされた。2014年4月までには全域が解除されたものの、放射能汚染等の影響により人口は事故前に比べて減少した。都路町の人口は、2011年2月時点では2,977人であったが、2023年2月時点では2,015人に減った。また、世帯数は985から860世帯に減少した。表1は、田村市における行政局別人口である。他の地域に比べて、都路町の人口と世帯数はともに少ないことがわかる。

表1 2023年2月現在の田村市行政局別人口と世帯数（単位：人）

	男	女	合計	世帯数
滝根町	1,973	2,048	4,021	1,502
大越町	1,974	2,028	4,002	1,435
都路町	1,050	965	2,015	860
常葉町	2,416	2,457	4,873	1,767
船引町	9,486	9,792	19,278	7,236
総数	16,899	17,290	34,189	12,800

出所：田村市企画調整課提供資料「田村市行政局別世帯数人口調」より筆者作成。

また、少子化に伴い学校に通う子どもが減少している。田村市では小学校の統廃合が行われてきた。2017年には、古道小学校と岩井沢小学校が統合して田村市立都路小学校が開校した。田村市立都路小学校は都路町にある唯一の小学校である。2023年時点における全校児童は41名となっている。

頭ノ巣には、2023年2月現在、男性27人、女性30人、合計57人が住んでいる。そのうち65歳以上は33人である。高齢化率は約57.9%と高く、高齢化が進んでいる。また、子どもは1人であり、少子化も深刻な課題である。頭ノ巣には25軒の家があり、そのうち空き家は4軒となっている。



### 3. 頭ノ巣の景観

#### 3-1 農林地管理の課題

頭ノ巣では、福島原発事故による放射能汚染の影響や少子高齢化による人手不足で農地を利用・管理する人が減少している。そうした要因から、頭ノ巣では耕作放棄地が年々増加し、集落における大きな課題となっている。耕作放棄地とは、1年以上作付けされず、農家が数年以内に作付けする予定がないと判断された農地を指す。

福島原発事故前には、耕作放棄地を利用するために、佐渡島に生息するトキの餌となるドジョウの養殖を行っていた住民がいた。しかし、福島原発事故による放射能汚染の影響でドジョウの養殖は廃止になった。

また、道路沿いに広がる森林が手入れできていないことも課題としてあがっている。福島原発事故による放射能汚染の影響で森林の利用や整備が十分に行われなくなった。それによって、生い茂った木や竹が道路にはみ出し、交通を妨げたり、景観を悪くしている。頭ノ巣では、中山間地域直接支払い制度を利用し、一部の住民がボランティアで道路沿いの森林整備を行っている。今後、森林を管理する体制を考えていく必要がある。

#### 3-2 鳥獣被害

害獣対策は頭ノ巣における課題の一つである。30年ほど前までは、イノシシが集落に入ってくることはなかったという。福島原発事故後は、耕作放棄地が増えたことにより、害獣の数も種類も増えた。イノシシに加えて、最近ではニホンジカや、カモシカも山から降りてくるようになった。害獣は、作物に実がついてきたところに田んぼや畑に入ってきて、実を食べたり、農地を荒らす。それによって、農家は、農作物の収穫量が減ったり、値段のつかないなどの被害に悩まされている。

集落の農地全体に網や電気フェンスを張り巡らせて対策を図ろうとしたものの、費用がかかることや、土手草を管理する負担が増すということから断念したようだ。一部の農地では、電気柵が設置されているが、イノシシが電圧に慣れ、年々電気柵の効き目が薄れてきているという。

#### 3-3 景観づくりにおける展望

藤原遙ゼミナールを受け入れるにあたり、頭ノ巣では有志を募り、「ひと葉の風」という任意団体が立ち上がった。団体名には、頭ノ巣のシンボルとなっている大イチョウの木にちなんで「一枚の葉を起こせる風は小さくとも、みな合わせれば大きくなる」という意味が込められている。

ひと葉の風の目標は、「集落を美しく畳む」ことである。その目標には2つの想いが含まれている。先祖が美しい景観を後世に残してくれたように、自分たちも土地を荒らさずに綺麗にして残したいという想いと、たとえ無人の集落になったとしても、集落で暮らすことのできる環境を将来世代に繋ぐという想いである。活動の参加者は、当初は男性が中心であったが、最近は女性も加わっている。

ひと葉の風における活動の中核を成すのが景観づくりである。福島原発事故後は、耕作放棄地が増え、集落全体が暗い状態であった。集落を明るくしようと、景観づくりに取り組み始めた。毎年、紅葉の時期には、集落の中心にある大イチョウのライトアップを行っ

ている。電灯の少ない集落に照らし出される大イチョウは、住民に安心感を与えている。

今年から、戸草という地区を対象に、耕作放棄地の景観をよくしようと、草刈りをして、そこに観賞用の作物や花を植えはじめた。図3には、戸草の地図と耕作放棄地の写真、および新たに植えた作物や花のイメージ写真を載せている。

試験的にアカソバとハスの花が植えられた。アカソバは、一般的なソバよりも収量が少ないため、食用よりも観賞するために用いられることが多い。頭ノ巣では、ピンク色のきれいな花を観賞することを目的に植えられた。ソバを栽培しないため手入れをする必要はない。ハスの花については、ひと葉の風のメンバーの一人が育ててきた経験があった。頭ノ巣の気候条件に合う花であり、景観にもよいことからハスの花が選ばれた。

女性たちは、集落の入口にあるふくしま中央森林組合都路事業所木材加工センターの看板付近にペコニアの花を植え始めた。参加者に話を聞くと、女性同士で一緒に作業したり、話をしたりすることが楽しく、嬉しいと感じている人が多かった。また、活動を通じて、自らの庭や、集落の環境に対する意識が高くなったという声もあった。女性たちは、今後も色々な花を植えていく予定のようだ。

藤原遙ゼミナールでは、引き続き、ひと葉の風とともに、戸草の土地利用のあり方について議論を重ねていく予定である。

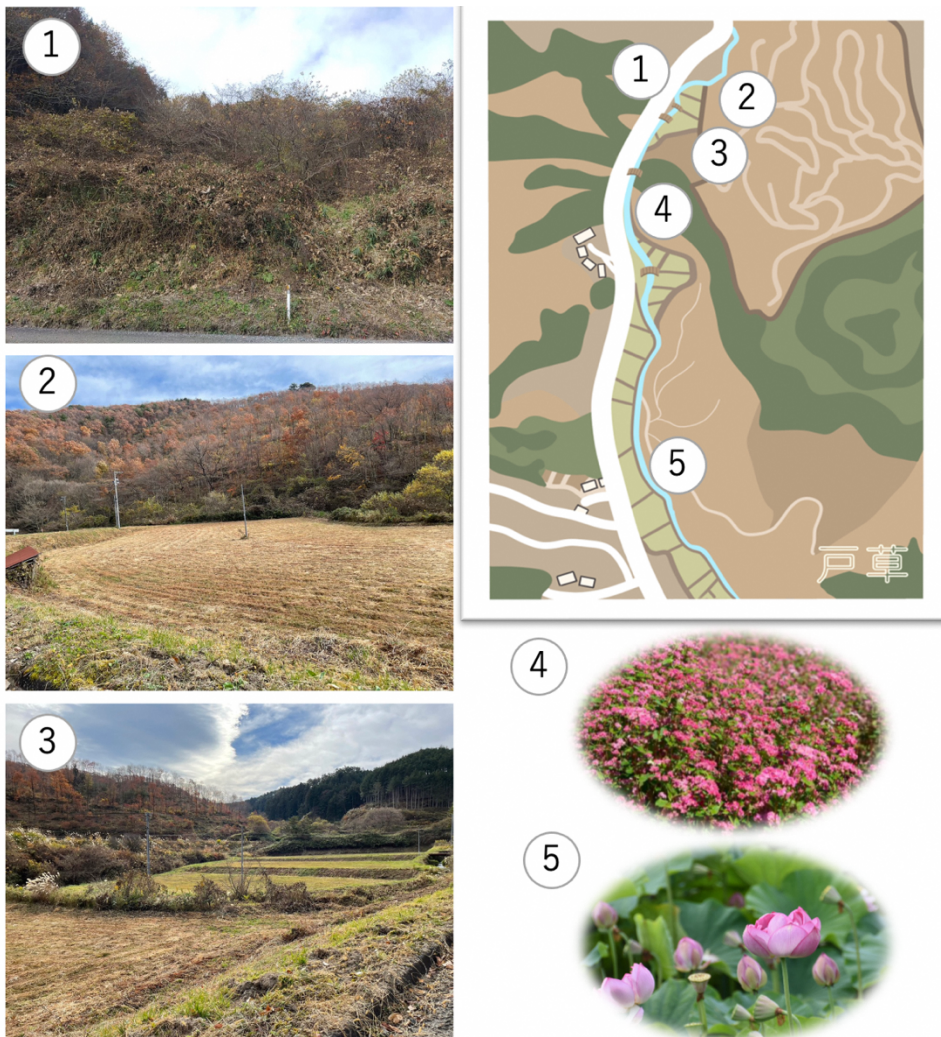


図3 戸草の地図と写真



## 4. 頭ノ巣のコミュニティ

### 4-1 結の機能と課題

頭ノ巣では、「結（ゆい）」と呼ばれる慣習があった。住民同士が相互扶助の精神のもとで、ともに助け合い、協力し合うことである。結の精神が集落の絆を強くしていったといわれている。

頭ノ巣では、結を通じて、田植えや稲刈り、結婚式、葬式(自宅葬・土葬)、養蚕、神輿づくりなどを共同で行なっていた。畜産が盛んであった時代には、住民が協力し合って牧草の収穫を行ったこともあった。しかし、人口減少や少子高齢化にともなう担い手不足や労働力不足、農業の機械化、ライフスタイルの変化、葬式や埋葬方法の変化にともない、かつてのような結の機能は年々低下した。現在は、かろうじて葬式で結が残っているものの、結が盛んであった時代に比べて、住民同士で集まる機会がほとんどなくなってしまったという。

### 4-2 行事の現状と課題

頭ノ巣には、様々な行事があった。春には馬頭観音の縁日があり、それぞれの家で作った草餅を撒いた。秋には、五穀豊穰を祈願する二柱神社の例大祭が3日間にわたって行われた。初日にはやぐらを作った。出店が並び、花火が打ち上げられた。2日目の本祭りでは住民による歌や踊りが披露され、賑わった。最終日は「さっぺ」と呼ばれ、片づけや打ち上げをした。例大祭には他地域からも多くの人を訪れ、この集落の一大行事となっていた。

また、男女に分かれて集まる行事もあった。男性の集まりは山の神である。頭ノ巣では炭焼きが盛んであったことから、山仕事をする人たちの安全を山の神に祈願した。女性の集まりには冬の観音講がある。集落の女性たちが料理を一品ずつ持ち寄って交流した。

これらの行事は人口減少にともない、縮小・廃止を余儀なくされた。山の神は山の仕事に携わる人が減少したために廃止し、観音講も時代の変化とともに行われなくなった。例大祭は、唯一継続している行事であるが、近年の新型コロナウイルス感染拡大の影響により大幅に縮小して参拝だけ行っている。住民の高齢化にともない外出することが難しくなり、行事のみならず、飲み会でさえも開催することも難しくなった。

### 4-3 食に関わるコミュニティの現状と課題

頭ノ巣は標高が高いところにあるため、林檎や梨などの果物は育ちづらい。柿や梅は育つことはあっても実は小ぶりで大きくならない。また、耕作地の多くが傾斜地かつ高冷地であるため、晩霜等の被害が生じやすい。かつて米は十分にとれなかった。白米は1年のうちに数回しか食べることが出来ないほど貴重な食糧とされていた時代もあった。主食には、米だけでは足りないため、カボチャやサツマイモ、ダイコンの葉などの野菜を入れて量をかさ増したものを食べていたようだ。油や野生動物等も貴重であった。使用することのできる油は基本的に魚の脂であった。卵、魚、ウサギなどは、貴重なタンパク源とされてきた。それらは、集落における特別な日やお祝い事にしか食べることができなかった。

耕作条件が悪い頭ノ巣では、山菜やキノコ等をはじめとする地域にある山の資源が食材として用いられてきた。春にはタラノメ、コシアブラ、セリ、ヤマウド、ゼンマイ、ワラ

ビ、コゴミ、フキなどの山菜が食卓にのぼった。夏にはグミやクワの実をおやつ代わりに食べてきた。川や田んぼではサワガニやドジョウを獲った。秋にはマイタケ、ニホンシメジ、ホンシメジ、センボンシメジ、ムラサキシメジ、マツタケ、シイタケ、コウタケ、クリタケなど多種多様なキノコに加え、アケビ、ヤマブドウ、ヤマナシ、コクワ、トコロイモなどを採って食べられてきた。冬には、他の季節と比べて食べるものが少ない。春に採れた山菜やキノコを塩漬けして保存食にした。山菜やキノコは、経験や感覚に頼って探し当てる必要がある。頭ノ巣では、経験知や生息場所は共有されないことが多いようだ。

頭ノ巣では、食をテーマに地域づくりに取り組んだことがあった。2008年に小学校が廃校になったことを契機に、頭ノ巣と大久保地区から成る第10区を元気づける活動として「都路第10小学校建設計画」が立ち上がった。地区の住民で、小学校の授業に見立て、オリジナルの授業を企画し実施する活動である。2011年2月には、給食の授業が企画され、地区の住民によって伝統食が再現された。これは食育や地区の食材を使った加工品を考案することを目的としていた。そこでは、おやつとして食されていた「柿のり」、結婚式や祝い事のときに作られていた「キジの吸い物」、秋の行事食とされていた「団子粥」、日常におかず用に用いられていた「大根葉の粕煮」などが振る舞われた。

しかし、翌月には原発事故が生じ、都路第10小学校建設計画は頓挫した。放射能汚染の影響で、地元の山菜や野生キノコも事故前のように自由に採って食べることもできなくなった。

#### 4-4 コミュニティづくりにおける展望

頭ノ巣には、結のような相互扶助の慣習があり、様々な行事があった。住民同士のつながりが非常に強い集落であった。時代の変化にともない、結の機能が低下し、行事が少なくなっていた。そこに、福島原発事故や新型コロナウイルス感染拡大による影響が及び、コミュニティの希薄化が一層深刻になっている。

そうした状況を改善しようと、女性たちを中心に、食を通じたコミュニティの再生に取り組み始めた。藤原遥ゼミナールが2月に訪問した際には、女性たちがつくった20種類の地元食が振る舞われた。地元食とは、地元の食材を使ってつくられた地元の料理である。伝統食にこだわらず、国内外の食文化を取り入れて地元の食材をより美味しく食べる方法を開発する。頭ノ巣で食べられてきたお蒸しやおまんじゅうを現代風にアレンジしたものや、野菜をつかった色とりどりの漬物、地元の食材をふんだんに使ったベーグルなど、様々な料理がテーブルに並んだ。地元の若手農家の指導のもと、新米を羽釜で炊いて、おにぎりにして食べた。住民と学生と一緒にテーブルを囲み、地元食を美味しく味わった。

今後は、耕作放棄地を活用して、地元食の食材を植えて収穫時期にお祭りを開くことや、地元食の料理教室などを開催する案が出されている。こうした内容を来年度の集落計画に盛り込んでいきたい。できることから少しずつ実践していくことが、コミュニティの再生につながっていくと考える。





羽釜で炊飯体験



おひつにご飯を移しておにぎりをつくる



酢漬けトマト、たくあん、煮卵、大学芋、かんぷら、赤カブ漬け、辛味噌、甘煮ゴボウ



甘煮キュウリとあんこのお蒸し、ニンジンとナツハゼのベーグル、ふきのとう味噌と梅あんこのおまんじゅう、白菜の漬物、塩漬けフキ炒め、ダイコンの酢漬け、酢漬けトマト





すいとん汁、チヂミ、カボチャのいところ煮



みんなでマスク会食



頭ノ巣の住民と藤原遥ゼミナールと集合写真

## 5. 頭ノ巣の集落計画づくりに向けて

### 5-1 景観づくり

景観づくりについては、「後世に誇れる景観を残す」ということが将来目標の軸になると考えられる。住民からは「将来、今の若い世代が頭ノ巣を訪れた際に景観を楽しんでもらいたい」という意見が多く挙げられ、子どもや孫の世代のために景観を良くしていきたいという強い想いが感じられた。

活動の方向性については、2つの意見があった。1つ目は、人の手を加え、荒れている土地を整備していくことである。2つ目は、人の手を加えず、ありのままの状態に残していくことである。どこに手を入れて、どこをそのままの状態に残していくのか、来年度には、集落計画づくりをする中で土地利用・管理のあり方を住民とともに考えていきたい。

### 5-2 コミュニティづくり

コミュニティづくりにおいては、住民間の交流を通してつながりを深めていくことが目標になると考えられる。

結の機能が低下し、行事も大幅に減ったことで、住民同士が交流する機会がほとんどないのが現状である。住民からは、地元食を開発して、発信・販売することや、頭ノ巣において景観の良い場所をPRするなどのアイデアが出ている。来年度は、具体的にどのようなことに取り組んでいくか、住民からより多くの意見を集めて、一緒に考えていきたい。





田村市都路町頭ノ巢  
集落自主活動に係る伴走支援事業実施報告書

発行日：2023年2月

編集：福島大学経済経営学類 藤原遥ゼミナール